

発掘調査速報展 2018 vol.2 材木座町屋遺跡／北条時房・顕時邸跡

特 集

水と暮らす中世

平成 30 年 3 月 24 日 [土] ～6 月 9 日 [土]

鎌倉歴史文化交流館 鎌倉市扇ガ谷 1-5-1 TEL:0467-73-8501

鎌倉は源頼朝が幕府を開いた地として知られていますが、中世都市として発展した鎌倉には、武士をはじめ商人や職人など多くの人々が生活していたことがわかっています。それは、発掘調査により、鎌倉の地下から昔の人々が生活していた住居の跡がみつかったり、当時使っていた道具などが数多く出土したりするからです。

しかし、数百年前の人々の生活を知ることができる貴重な遺跡も、現代に生きる私たちが生活していくための土木工事などで失われてしまう場合があります。このように、やむを得ず失われる遺跡について可能な限り記録を残し、未来へ引き継ぐために発掘調査は行われています。

今回の速報展では、「水と暮らす中世」をテーマに、平成 28 年度に実施した発掘調査のなかから、材木座町屋遺跡（材木座二丁目 2 3 6 番 1 地点）と、北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目 2 6 5 番 2 地点）の調査結果を、出土した遺物と関連資料により紹介いたします。

鎌倉に住む人々の暮らしは、水とともにありました。中世人は、井戸を掘り、排水のために溝をつくり、都市生活の環境を整えていきました。とりわけ海に面する鎌倉は、多くの海産物をとることができ、人工の港・和賀江嶋が築かれることで、交易の拠点ともなっていきました。鎌倉の人々は、水とともに暮らすことで、多くの恵みを楽しんだのです。

日々、鎌倉市内で行われている調査のごく一部ですが、数百年前の鎌倉に住んだ人々の生活を思い描きながらご覧いただければ幸いです。

材木座町屋遺跡（材木座二丁目236番1地点）

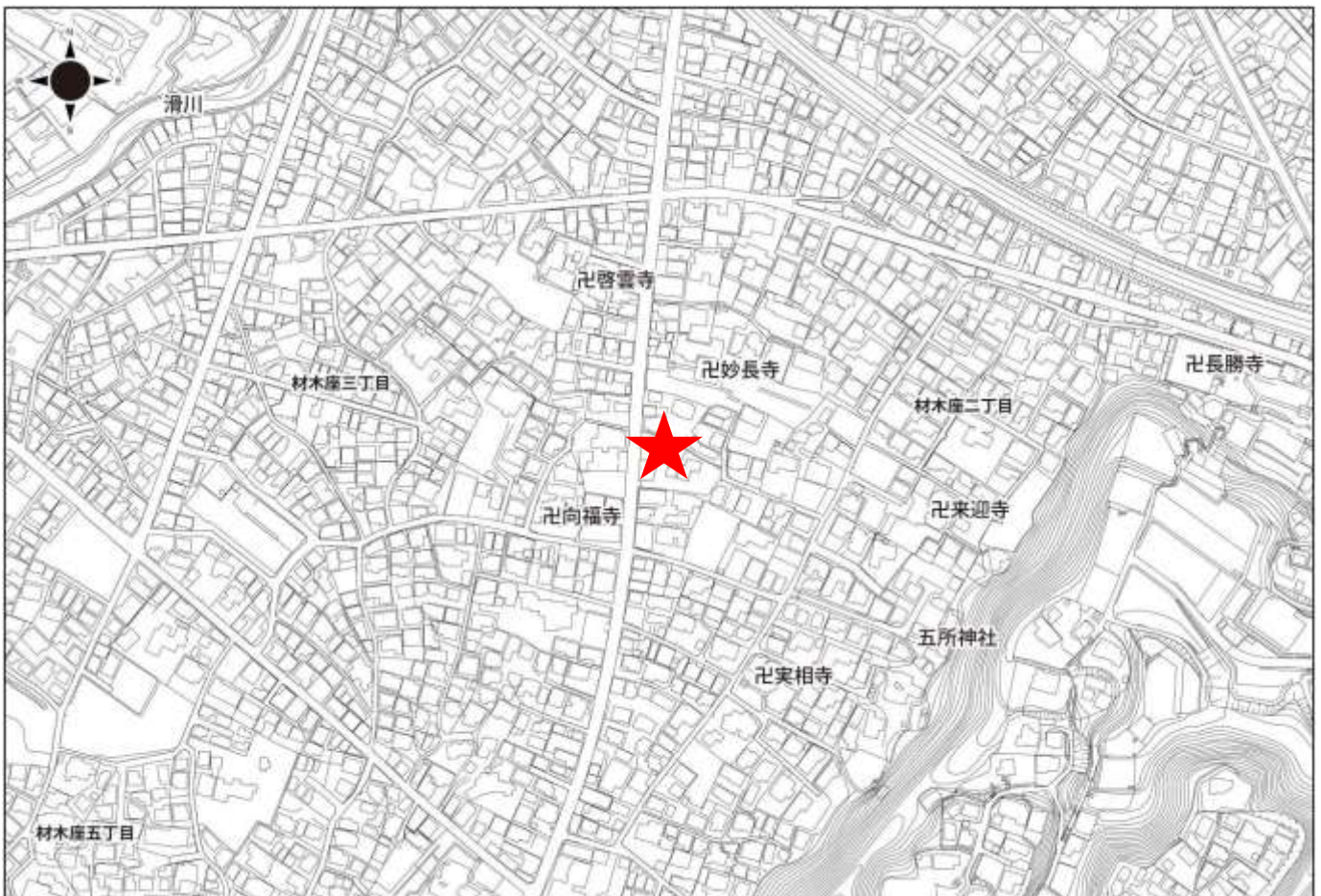
ここでは、古代から室町時代にかけての遺構・遺物が発見され、特に13～15世紀代にわたる土地利用が明らかになりました。調査地の西に接する道路は小町大路の延長にあたり、和賀江嶋に水揚げされた生活物資や交易品、建築材などが行き交う重要な道路であったと考えられています。また、町名の「材木座」は材木を取り扱う「座」（同業者組合）があったことに由来します。中国産・国産の陶磁器、羽釜、土鍋、瓦などの焼き物の類のほか、鞆の羽口、鉄滓、鉄釘や銅銭、滑石製の鍋、砥石、骨角製の辻具、箸、獣骨、貝、種子などさまざまな種類の遺物が発見されました。発見された建物跡や井戸・溝などから、工房で使う鞆などの遺物も出土しているため、この場所は集積された物資の保管・加工を行っていた人々の生活跡と考えられます。



材木座町屋遺跡の遺構



調査地から海を臨む



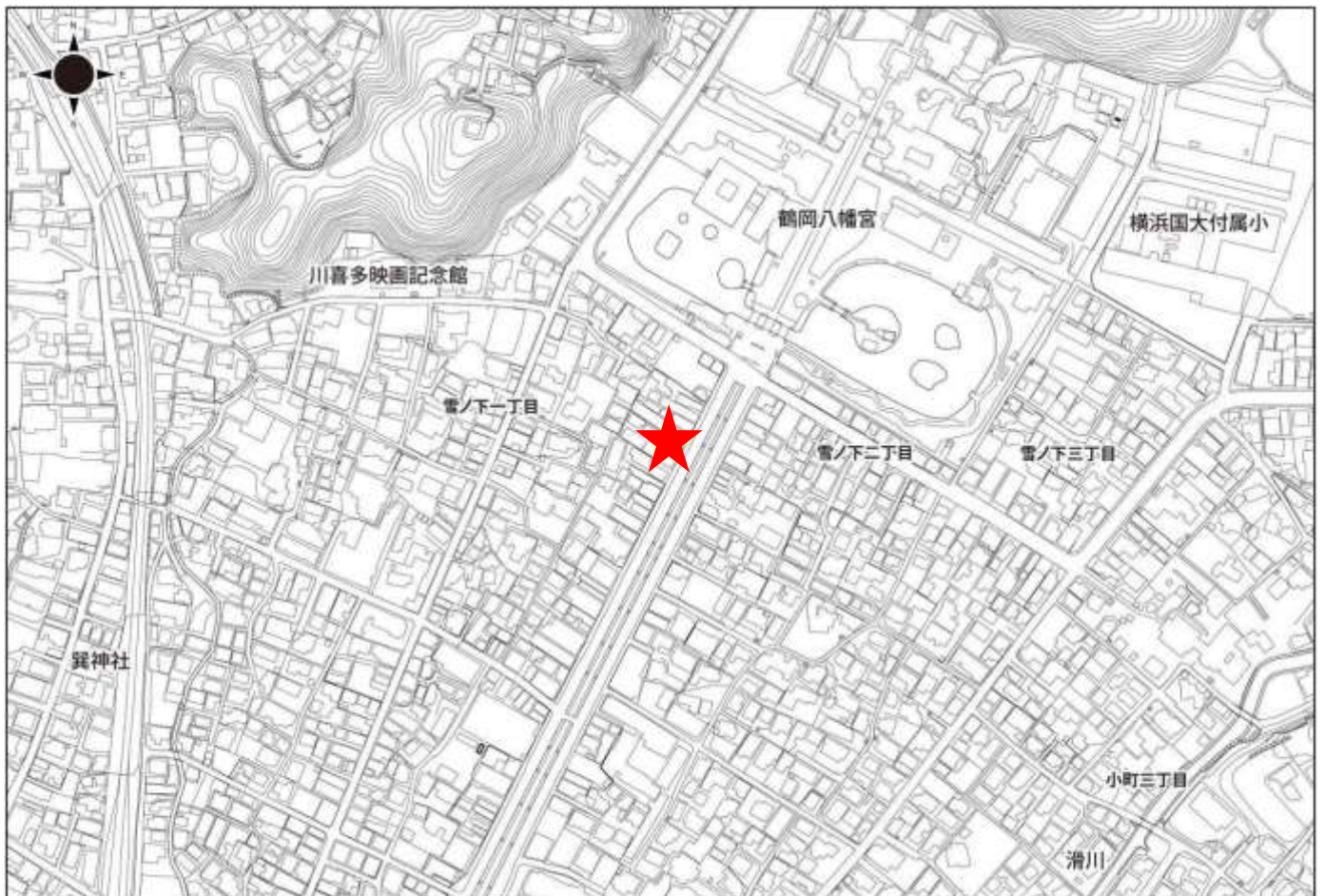
北条時房・顕時邸跡

(雪ノ下1丁目265番2 地点)

この遺跡は、鶴岡八幡宮の南、若宮大路の西側に面し、鎌倉時代には北条氏の館があったとされる区画に位置しています。発掘調査では、鎌倉時代(13世紀)から室町時代(15世紀)にかけての館の一面と考えられる遺構や若宮大路の側溝が発見されました。当時の生活面は、地表下1.3m~2.5mの間に5面見つっています。最下層の第5面は現地表下2.5mにあり、13世紀前半と考えられる溝・土坑・柱穴などが発見されました。第4面は13世紀中頃と考えられ、土丹地形の部分と良質の砂を敷き詰めた部分からなり、木組みを持つ若宮大路の側溝が造られていました。こうしたあり方は第2面まで継続していました。また、若宮大路に直交する小さな溝、漆喰が塗られた井戸・土坑・柱穴なども発見されました。第3面・第2面は13世紀後半から14世紀前半と考えられ、ほぞ穴がある土台材、土留めの側板、倒壊を防ぐ控えの梁を備えた若宮大路の側溝や礎石列、礎板列、囲炉裏などが発見されました。第1面は15世紀以降の井戸などが発見されています。



若宮大路側溝



海の玄関口 和賀江嶋

鎌倉に武家政権が置かれると、次第に都市の整備が進められてきます。道や港が整えられると、より多くのモノや人が各地から集まるようになりました。

その玄関口の一つとなったのが、人工の築港・和賀江嶋です。和賀江嶋が造られたのは貞永元年（1232）のことです。念仏僧の往阿弥陀仏が北条泰時の支援のもと築造しました。以降、和賀江嶋を中心とする地域は、貿易の拠点・鎌倉幕府公認の商業地として発展していきました。

この付近は、築港以前からも船が行き交い、賑わいをみせていました。貞応2年（1223）、鎌倉を訪れた『海道記』の作者は、海沿いの賑わいを、「千万宇の宅、軒をならべて大淀のわたりにことならず」「（鎌倉の）東南の角一道は舟興の津、商売の商人百族にきはひ」と書き記しています。

また鎌倉時代後期、和賀江嶋や浜一帯の漁場活動の管理権は極楽寺にあったとされています。和賀江嶋を利用する船舶から徴収される関米は、嶋の維持費用にも充てられていました。



北条時房・顕時邸跡出土の井戸



材木座町屋遺跡出土の井戸

井戸を掘る

鎌倉は海に近く、大きな川もないため、良質な飲水を得るためには、井戸を掘る必要がありました。武家屋敷では塩分を含まない良質な水を得るため、岩盤まで掘りこんだ井戸もつくられていました。

鎌倉市内では、中世の井戸跡が数多くみついています。素掘や石を組んだもの、木枠をもつものなど、様々な種類があります。

井戸が作られるのは、武家屋敷の場合は建物の裏か横で、道から奥に入ったところに造られることが多かったようです。大きな屋敷では複数の井戸が利用されていましたが、庶民の居住地では一つの井戸を共同で使っていた可能性も考えられます。

井戸で汲んだ水は曲物などの貯水容器に入れられ、屋内やその周辺に置かれていたと考えられています。

中世の出土事例のうち、最も多いのが木組みの井戸です。発掘調査の成果から、木組みの井戸には幾種類かの工法が確認されています。

溝を造る

若宮大路沿いの発掘調査では、大路の側溝が見つっています。現在側溝は、二ノ鳥居から三ノ鳥居の間で確認されおり、当調査地でも、同様の側溝が見つかりました。側溝は幅約3m、深さ約1.5mの大きさです。大路の両側で見ついている側溝の位置から、鎌倉時代の道幅はおよそ30mほどであったといわれています。

若宮大路等の主要道の側溝は、木組み構造になっているのが特徴です。これは梯子状の木組み材を横にして溝の横面にあて、そこに板壁を付けて壁面とするものです。板壁が倒れないよう、壁面の柱には地中に埋め込んだ「控え梁」がつけられ、地面側へと横方向に引っ張っていました。

鎌倉が隆盛する13世紀後半には木組みの側溝が成立していたと考えられており、何度も造り替えが行われていることが確認されます。

